

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

吾妻鏡事典

〈最新刊〉

佐藤和彦・谷口 榮編 本書は、政治と合戦、登場人物、吾妻鏡の社会史・書誌研究から構成し、吾妻鏡を多角的に考察し、中世社会の本質を解明。定価五二五〇円

(価格は税込)

江戸狂歌本選集 全十五巻

選集刊行会編 明和～安政期の江戸の代表的な狂歌集七十二種を原本に忠実に翻刻するもの。江戸文芸の研究には必須の資料。既刊十四冊。定価各一五七五〇円

仮名草子集成 第四十二巻

深沢・伊藤・入口・花田編 本巻の収録分は「四しやうのうた合」「四十二のみめあらそひ」「水鳥記」寛永七年上方板と松会板「杉楊枝」を収載。定価一八七三〇円

難読・稀少名字大事典

森岡 浩編 難読・稀少の名字約一四〇〇姓を採り上げて、独特の由来をもつ名字や地域に関わる名字など解説。音訓から引ける五十音順配列。定価七一四〇円

江戸時代の古文書を読む

〈文化・文政の世〉 古文書を読むシリーズの第五冊目。十一代将軍家斉の時代の古文書をテキストにして原文が読めるよう工夫した好評の入門書。定価二四一五〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

源氏物語へ 源氏物語から 中古文学研究 24の証言

永井和子編 45冊 9975円
源氏物語を中心に、その前後の作品も取り込んだ論文集。執筆24名

中世歌壇と 歌人伝の研究

井上宗雄 45冊 1475円
諸家道家の動向、和歌の文芸的・実用的性格、歌壇史研究等解析。

詩の起原

東アジア文化圏の恋愛詩
辰巳正明 45冊 8190円
中沢けい氏・平出隆氏激賞。大好評！オンデマンド重版2刷出来。

日本 文学色彩用語集成

伊原昭 〔上代〕新装版
45冊 19425円
万葉集、記紀、古代歌謡、懐風藻、風土記などを網羅、詩人の大岡信さんには「はっと目がさめたようになる」と言わしめた名著の復刊！
昨年9月に新装復刊の「中古」は早くも品切。

〔近世〕
45冊 29400円

稲賀敬二 コレクシヨン

③「源氏物語」その享受資料
全6巻刊行中 / 45冊 9450円
国文学界に鮮明なインパクトを与えた著者の単行本未収録論考群。

越中万葉百科

高岡市万葉歴史館編
45冊 2730円
大伴家持が越中赴任中に詠んだ歌他「越中万葉」の初のハンドブック。

「を」に「の」 謎を解く

竹林一志 45冊 2625円
「を」「の」の本質の意味に迫り言語研究の意義を鮮やかに導き出す。

西鶴と浮世草子 研究

第一号◎特集 怪異
高田衛・有働裕
佐伯孝弘編 45冊 2575円
人々は怪異譚を追い求め、作者たちはそれを提供した。江戸期に挿見しつづけた怪異をあらゆる角度から論じ尽くす。豪華冊談。高田衛×小松和彦×長島弘明。豪華特典CD収録。怪異物語絵大全(佐伯・近藤編)杉本好伸編「武太夫物語絵巻」(歴博蔵)。堤邦彦・有働裕編「江戸の怪異スポット」他。

45冊 29400円

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331
http://kasamashoin.jp/ ファックス03-3294-0996

国文学 10

特集 振り返る中原中也

特集 振り返る中原中也

中村稔 中原中也と富永太郎

中原豊／北川透／樋口覺
森田雄三／足田雅昭／福島泰樹
和合亮一／友部正人ほか

国文学 解釈と教材の研究

平成十九年十月十日発行 毎月一回十日発行 第五十二巻 第十二号 十月号
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (通巻七五六号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

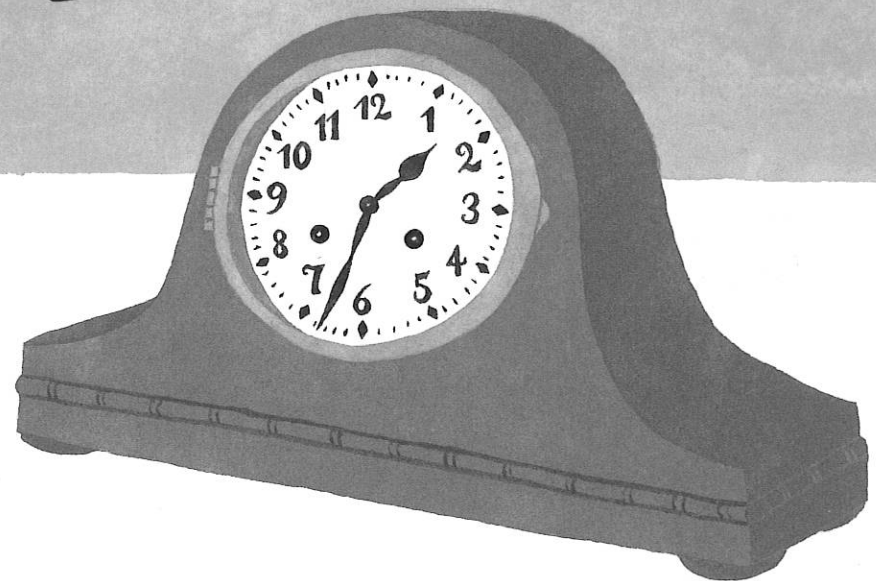
第五二巻 第十二号 二〇〇七年十月

學燈社

国文学 10

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇七年 第五二巻 第十二号
解釈と教材の研究



一挙三本連載開始

- 「心意伝承」本莊雅一
- 「父が子に語る日本の歴史」田中英道
- 「鬼の思想」綱沢満昭



ISSN 0452-3016
雑誌 03787-10



4910037871077
01524

心意伝承

—遊働世界に生きる—

本莊雅一

第一回 心意伝承とは何か① 衝撃の初講

天地初発

空のよろめきを見る遊びが好きだった。

くるくるスピンドルしてから大の字にひっくり返る。ブランコで仰向けになって揺られる。そうしていると、空の青さや、雲、建物などがゆらゆらよろめいて、自分のほうが宙空に取り残されているような、甘美な不安に襲われる。これは私個人の感覚ではない。子供たちはみなめまいを求める。遊園地のアトラクションなどはほとんどそのためにあるといつてよい。文学部教授上原輝男の講義を受けながら、私はそんな思いにとらわれていた。

『古事記』の冒頭は次のように始まる。

天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日

神。此の三柱の神は、並獨神と成り坐して、身を隠したまひき。次に國稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用弊流時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

〔日本古典文学大系 古事記 祝詞〕岩波書店 五一頁による

現代語訳も解説もなく、上原教授はただ「感覚を磨け」という。「この場面を絵に描いてみる。」「こんなイメージが、一体どうやって生まれるのかを考えなさい。」「古代人の感覚の凄さを味わえ。そして、君たちの感覚がいかにだらしなくなつたのかを思い知れ。」「創作文学

などくだらん!」「なにが個性尊重だ。ちゃらちゃらした下品な「個性」など捨ててしまいなさい。それでもなお滲み出てくるものがあれば、それが本当の個性だろう。神性と言ってやつてもよい。」

私が大学というところに入って、いっとう最初の講義はこんな風に始まった。著名な教授というわけではない。が、圧倒的だった。私達が懸命にしがみつこうとする常識を、これでもかこれでもかと粉砕してくる。それまで出会ったどんな人物よりも圧倒的な覇気に、我が身が貫かれ、その教室まで異次元の世界に溶解してしまつた。

教授が白チョークを取って、黒板いっぱい円を描いた。陰陽二極の話。だが、覚えていない。その円が、あまりに見事だった。宇宙の彼方を疾駆する白い龍。その輪が閉じられた途端に、もうひとつ別世界へもって行かれたのだった。「天地初発」とはいかないが、ブランコで蒼空を漂った思い出。ビルや団地、鉄塔などの頑丈な輪郭が揺らいで、青空となじみあうさまに友達とけらけら笑い合ったこと。記憶と上原教授の講義とが緬い交ぜになつていった。

それにしても、何のいわれもなく「天地初発」と子ども遊びとがオーバーラップするものだろうか。かたや

『古事記』に展開するイメージ世界の凄さを聞きながら、私の妄想は膨らむばかりだった。砂場でのどろんこ遊び。お目当てのザリガニそつちのけで、たんぼの泥濘にのたうち回つたこと。足指の股からはみ出す粘土。快感。なぜだろう、どうしても結びつく。

「人間中心に考えていては何も分からない。」上原教授は言う。「日本は自然が豊かな国だ。しかし自然の量の多さを言うだけなら、大陸にかなうわけがない。自然のさまざまなはたらきを謙虚に受けとめる感覚が、日本人は豊かなのだ。現代人はその事を忘れてしまつた!」「自然、などという言葉すら持たなかつた。日本人はいたる所に神を感じ、神を見つけていた。神のわざに従うから、間違つた生き方はしてこなかつた。」「今の世の中はどうだ。文化も道徳も最低ですよ。異常犯罪やいじめだけが問題なんじゃない。」「敗戦後に、日本人は、本来持っていた精神文化を捨ててしまつた。それが墮落の始まりだ。」「個性尊重」などと有り難がつて、背骨まで失つてグニャグニャしてもそれが個性だとうそぶいてるに過ぎない。」「我々は生かされているのだ。君たちは傲慢だ。臆病だ。自分を手放しにする勇氣を持つてみろ!」

反感を抱いてもよさそうな話ばかりが、不思議に骨ま

で沁みてくる。教授の言いたいことが、その一言一言から何十倍も聞こえてくる。そうか、私個人という小さな枠にこだわるなんて、ばかげたことだったんだ。「自然と一つになる」とは、自分が消えることではない。宇宙の意思と自分の意思とが深層で繋がっていると、知るところだ。「生かされている」と感じてしまうと生き方が、自分の本当の志なのだ。

天地が遊働するイメージ。その意味で、「天地初発」もブランコ遊びもどろんこ遊びも、同じ心の表象である。啄木は「空に吸われし十五の心」と詠うが、それもやはり、人間が主体ではなく、生きていく風景に拉致される感覚が、我らの生の「元来」だと知ったのだ。何かに翻弄されているほうが、我々は新鮮な気分であるから。

ウルトラマンの誕生

「我々は『創造』など出来ない！」上原教授の舌鋒はますます鋭くなる。おかしな人だ。絶望的な話を、俄然生き生きと、熱く語り出す。

我々は知らないうちに、古代人の心を受け継いでし

のイメージを表現していった。そうして、特撮技術と、日本人の原郷とも言える沖繩人の魂とが集合して、『ウルトラマン』が誕生したのだ。

その『ウルトラマン』にしても、一作家のオリジナルな創造などではなく、古代からの人々の想念を再現しているという。まただからこそ、人々の心をしびれさせるのであると。庶民の素直な心象を表現する神話・伝説・昔話などと比較してみると分かりやすい。そうやって次のように解き明かす上原教授の話に、私達は啞然とした。

ウルトラマンは、M78星雲という別世界からやってくるが、例えば沖繩の祭祀では必ず、ニライカナイという海上の他界から神々が訪れる形を取る。その神が豊饒をもたらすと信じられている。桃太郎も川を流れてやってくる。山中という他界から超常的な存在が現れるパターンを踏んでいるわけだ。

怪獣達はどこから現れるか。沼や湖といった、水源から現れるものが多い。ササノオノミコトのヤマタノオロチ退治譚などは、出雲の斐伊川が舞台。大蛇おろちといい、大蛇みづち（『日本書紀』仁徳天皇六七年条）といい、威力のある蛇類、龍などは、水神として信仰される。『みづち』

まっている。その心を再現しているだけだ。むしろ、再現したものでなければ、納得できない。教わってするのはない。ほとんど遺伝していると言っている。文学なんて、創造したもの一つもない。すべて古いにしへ人の心をくり返し語っているに過ぎない。現代人も、いくら創造しているつもりでも、そうした意識の連鎖からは、結局逃れられないのだ。

そこで初めて、上原教授は、悪戯っ子のようににたりと笑った。

「君たちは『ウルトラマン』を知っているだろう。」

知っているところではない。あれなくしては人生考えられないほど夢中だった。

「あれは、私が送り出した。」

意味不明。大学教授がテレビ漫画を作ったということか。いや、作ったとは言っていない。いったい……

『ウルトラマン』の原作者・金城哲夫は、私の教え子だった（この当時すでに故人）。彼は映画の世界を志していた。私自身、映画の脚本も書いていたこともあって、懇意にしていた円谷英二監督を金城に紹介した。沖繩出身で、神話世界にも関心の強かった金城は、円谷監督の特撮を学んで、遺憾なく自分

とは、『水霊』である。

地球にやってきたウルトラマンは、普段は人間に身をやつしているが、危急の場面で『変身』する。変身は、昔話神話伝説では枚挙にいとまがない。一寸法師に代表される「小さ子（蛙だったり、田螺、小蛇だったりもする）」が、一つの事業（鬼退治、花嫁探しなど）を成し遂げて、立派な成人に変貌する。女装したオウスノミコトが、クマツタケルを倒して『ヤマタケル』の名を与えられるのも、一種の変身である。変身とは、本性示現であった。

怪獣を倒したウルトラマンが、もしも怪獣を踏みつけてガッツポーズをとったり、人々の祝福に応えたりしたらどうであろう。がっかりではないか。そうではなくて、もの言わず夕日の彼方に『飛び去る』後ろ姿。その颯爽とした哀愁の残像にこそ、私達は何とも堪えられないしびれを催したのではなかったか。その『飛び去り』も、神話伝説や、歌舞伎に至るまで、数え上げればきりがない。神々の世界を追放されたササノオノミコトが、姉のアマテラスオオミカミに挨拶をしようと、天界に飛び立つ。『古事記』ではその威力が「山川せいのと悉ことごとに動み、國くに土皆震ふるりき」と描写される（七五頁）。近世にくだって歌舞伎を見ても、『鳴神（鳴神上人）』『勸進帳（弁慶）』

『暫（鎌倉権五郎）』『矢の根（曾我五郎）』などの幕切れ、主役の退場に際しては、太鼓や能管によって、「飛び去り」と称する下座音楽が鳴らされるという（『岩波古典文学大系 歌舞伎十八番集』四一八頁）。中でも、最も日本人に愛されたイメージは、やはりヤマトタケルである。伊吹山の神に敗れ、旅の途次に死するヤマトタケルが、白鳥となり、「天に翔りて飛び行で」るシーンは『古事記』（二二五頁）、そのまま『ウルトラマン』の最終回に重なるではないか。

してやられた、という感じはなかった。むしろ、一層深い感動に包まれていた。私達が心底夢中になってしまふことには、こんなに長くて、深い根拠があったのか。古典文学など、受験勉強以外ではほとんど読んだことがなかった。が、しかし、私達はすでに、深いところでは全てを知っているということになるのだ。と、そう考えたことを見透かしたように、上原教授はすぐに戒めた。

世阿弥が『花伝書』の中でこういつている。「家ニアラズ。続クヲ以テ家トス。人 人ニアラズ、知ルヲ以テ人トス」と（花伝書第七、別紙口伝 九）。我々は古代人の心を受け継いでいるが、それを知る

に伝わる根本のものがある。虚空にさらされて風化する稜線もあれば、全ての深層に流れる岩漿もある。それを突きとめようという学問を、上原教授はしているのだらう。そしてそれは多分、私が覓めていたものでもあるのではないだろうか……。

上原教授が、再びチョークを取って、黒板の上をさらさらと走らせた。さっきの円も驚いたが、この人の字の達筆さも尋常ではない。ほとぼしる滝が、びびりとはねながら落ちて行くような文字が、こうして浮かび上がった。

心意伝承

やられた！ 今度こそやられた。なんだこりゃ。もうだめだ。これしかないじゃないか……。

わけのわからぬ、絶望にも似た理不尽な感激に打ちめされた。邂逅ってしまった。それだけが分かった。目頭が熱くなってくるのを、どうしようもなかった。

上原輝男は、釈道空折口信夫最晩年の弟子であったという。若き日の上原青年もまた、折口に圧倒されて、このテーマを生涯の学究対象と決めたい。それから約三〇年、ひたすら悪戦苦闘の日々を送るが、この研究の

うとしなければ忘れてしまう。建物が、家なのではない。立派になって、結婚をし、子どもを産み育てるといふ、生命継承の活動そのものが「家」だ。同様に、肉体が人であるわけではない。ほんとうに知るべきことを、知ろうとする生命燃焼が、「人」だ。だから君たちはまだまだ「人でなし」だ。今からでも「人」になる修行をしなさい。はたちになつたら誰でも「成人」など、ばかげてる。

邂逅

頭の中はすっかり混乱していたが、不快ではなかった。清冽な混濁にあつて、何かとてつもないものが、この場から発酵する予感にふるえてきた。私達は、決して自由なのではない。しかしそれは、奴隸のように拘束されていることでもない。私達は決して、孤独ではないということなのだ。先祖と子孫という対立すら、不要と言える。遙か古から今に至るまで、実は「私達自身」が生き、「のちの私達」へと、その思いを伝えてきたはずだった。それがけちな個人主義に毒されて、大事なことを忘れかかっている。私達の心は、太古から伝わっている。もちろん激しく変化もしている。しかし、変わらず

魅力は増しこそすれ、決して色あせることはないと言われた。まさに我が心の秘めごとを探るのだから、妖しいときめきすら覚えてしまうのだろう。

還暦を過ぎ、年を追う毎に、上原博士は凄みを増していった。まさに轟音がきこえる勢いで、心意伝承研究の、一つの到達点に達しようとしていた。もちろん終着ではないが、おそらく博士にはその峠と、峠の向こうの山脈とが、ほとんど見えていたであろう。が、到達する寸前に、召し上げられてしまった。平成八年四月。あまりにも象徴的に、桜のはなびらが、はらはらと風に舞う朝だった。それは同時に、心意伝承研究の、死か停滞のどちらかでもあった。

そして一〇年。心意伝承について語る機会を与えられた。願ってもないことだが、研究者の末席にすらない身には、荷が重すぎる。ゆえにその重みの受けとめかたを、この長い前置きでまずは示してみた。これを覚悟と言えるかどうかは、わからない。ふと、ニーチェの言葉が思い浮かんだ。「血をもって書け。そうすれば君は知るであろう、血が精神であることを。」（『ツアラトゥストラ』手塚富雄訳 中央公論社 六〇頁）

我が血をもって、読者の血に語りかけてみようと思う。文字通り、血交いの書とするために。

語を愛するすべての人に!

豊かな人間性をはぐくむ、ことばのチカラ

豊かな表現を現代語で引ける

古語類語辞典

作家、演出家、コピーライター、デザイナー、記者、短歌・俳句・川柳をつくる人へ…必携!

現代語から古語を引く辞典

『現代語から古語が引ける古語類語辞典』の増補改題版

現代語の見出しのもとに古語の類語を延べ5万1千百収録。

自然 [天文・気候・地理・動物・植物]
人事 [人間・気持ち・動き・状態・物]
表現 [助詞・助動詞・その他] など3ジャンルでわかりやすい基本語の周辺見出し分類。

本文は現代語の五十音順見出し。新たに歴史的かなづかい解説・活用表・季語など古語の基本情報を加えさらに充実。日本語の世界が大きく広がります。

ISBN978-4-385-14042-1

実物大見本頁(部分)



ああ あな あなめ あなや あはれ
いかが いで いでや はしきや
し・はしきよし・はしけやし ↓かん
どう
ああだこうだ・ああもこうも とあり
かかき ともかくにも
ああもゆきこうもゆく【行行】 とゆ
きかくゆき【行行】
あい【愛】 ↓基本(P.61)
あいいろ【藍色】 あをにび・あをにぶ
【青鈍】 こある【濃藍】 こんじゃう
【紺青】 にがいろ【苦色】 はなだ【縹】
みはなだ【水縹】 わかなへいろ【若
苗色】 ↓基本いろ(P.12)
青みがかったー あをにび・あをに
ぶ【青鈍】
薄いー あさぎ【浅葱】
濃いー こある【濃藍】
あいきよう【愛敬・愛嬌】 あいぎやう

万葉の恋歌

——ケータイ短歌の時代に

恋する万葉のころをすべての人に体感していただきます。

- 万葉集全休における恋歌の位置
- 長歌で恋を語るということ
- (茂吉の万葉秀歌)
- 大伴家持の恋
- 人麻呂歌集歌の恋
- 挽歌も恋歌だ
- 官僚の恋
- 恋歌の小道具・アイテム10
- 恋の占い——おみくじ文化
- 現代短歌と万葉の恋歌
- ケータイで月と恋を詠む
- 歌垣
- 現代語訳・注釈の醍醐味

上野 誠	工藤 隆	井ノ口 史	山名美和子	俳句座☆シーズズ	小島ゆかり	平野 多恵	井上さやか	山口 博	仁平 道明	大浦 誠士	永田 紅	品田 悦一	木村 康平	身崎 寿
------	------	-------	-------	----------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	------

10月臨時増刊号 短篇小説50 9月25日発売 1785円

短篇を読んで、書き手になろう。
読んでおくべき/おすすめの外国と日本

国文学 一解釈と教材の研究一
平成19年10月号

平成十九年十月十日発行
編集人 大島圭一
発行人 佐野十
印刷所 大日本印刷株
発行所 株式会社 燈
東京都新宿区西早稲田三二五
〒169-8608
振替口座〇〇一四〇一〇一三
電話 五二二八二七五
FAX 五二二八二七五
五二二八二七五

◇数々の雑誌や新聞で取り上げられ
うに今年も中原中也が生まれて百年
当たりです。三十歳という若さで亡
天才詩人も生きていれば、今年で百
の様子を彼は一体どのように感じる
よう。この機会に生み出された多く
今後の中也研究に生かされることを
つ、特集をさせてくれた中也に感謝
げたいと思います。また、このよ
引き受けてくださった先生方、多く
の方々、特に中原中也記念館の中原
も、この場を借りて深くお礼申し上
◇今回から装い新たに新連載三本が
した。どれもこれまでにない力作。
「国文学」を存分に味わってください
◇今回は久しぶりに万葉集にスポッ
ます。現代から見た万葉集の新しい形
ぞ、ご注目ください。

きんたいち 16001